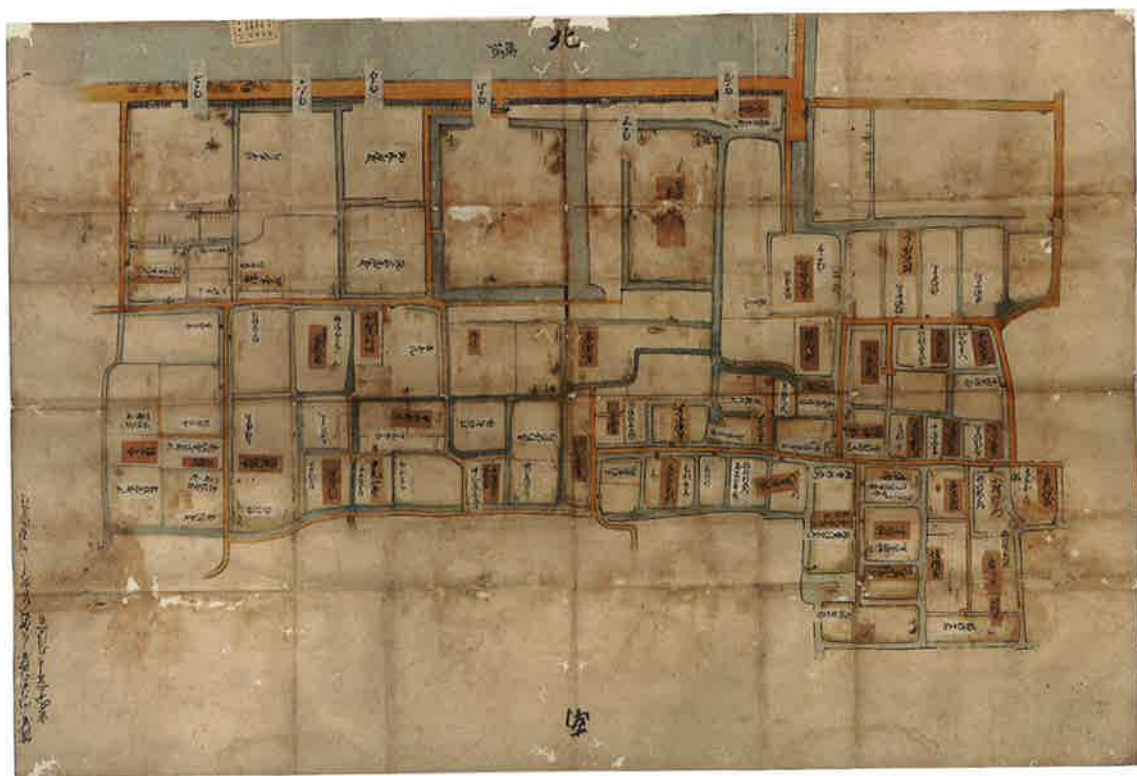


一 日本の城の歴史と佐賀の城郭

古代以来、東アジア諸国との接点だった西九州地方は、列島外で発達した文物・思想・技術が直接的に伝播する地域で、吉野ケ里遺跡や基肄城を抱える佐賀県は、国内でもいち早く外来の集落や要塞のスタイルを取り入れて実践に移した地域である。

鎌倉幕府が開かれて武家社会が始まると、各地の武士の館が政治・経済・軍事の中枢となり、南北朝期や室町期の内乱の過程で戦いに特化した山城が発達し、佐賀県でも多くの城が築かれた。戦国時代になると戦闘の大規模化・長期化によって城が巨大化し、各地域ごとの個性的な特徴を備えた大名拠点が誕生し、やがて権力の象徴としての性格を持ち始める。この頃佐賀平野では、網の目状に発達したクリーク（濠）に守られた平城が輩出され、これを足場にした龍造寺氏が急成長を遂げた。

中央では、織田信長や豊臣秀吉が天守や高石垣を持つ本格的な城郭を創出し、近世城郭の時代を迎える。佐賀では朝鮮出兵の基地として名護屋城が豊臣政権によって築かれ、全国に先駆けて最先端の築城技術が入ってきた。これに学んだ鍋島氏は佐賀城を築き、小城・蓮池・鹿島の藩庁を整備していった。唐津藩では、唐津城と城下町の建設が進められた。徳川政権が全国の城郭統制を厳しく進めたことで、佐賀ではこれら五施設だけが公認の藩政拠点と位置付けられ、明治維新まで存続したのである。



水筒江図

- 年代：寛文12年（1672）5月9日
- 作成・宛：
- 所蔵など：多久家文書（多久市郷土資料館蔵）佐賀県重要文化財

水ヶ江龍造寺氏の居城で、龍造寺隆信の生家でもある「水ヶ江城」は、藩政期には多久家城外屋敷（佐賀城の南隣）に継承されたため、佐賀独特の屋敷群型平城の形態が良く残された。本絵図は、寛文12年（1672）5月9日作成との奥書を持ち、県内の中世城館を描いた実年代がわかる絵図としては最古の作品である。